

中央アジアチュルク語の複合的動詞述語の研究

大崎 紀子

京都大学大学院文学研究科附属ユーラシア文化研究センター (羽田記念館)
センター外研究員、教務補佐員

緒 言

チュルク語は、ユーラシア大陸を横切る広大な地域に分布する言語で、最西のトルコ語から最東のサハ語まで、30余りの方言が認められている。チュルク語では、連続した複数の動詞の組み合わせによってアスペクトや動作様態などを表す複合的動詞述語が発達している。チュルク語の一つであるキルギス語を例に挙げれば、*ayt-ıp jiber* ‘言って送る’で「突然／素早く言う」、*oku-p cik-* ‘読んで出る’で「読み終える」という意味を表す。このようなチュルク語の複合的動詞述語については、チュルク各言語における個別的文法記述において数多くの記述がすでに蓄積されているほか、それらをもとに複数のチュルク語を対象とした地域の特徴、さらには類型論的特徴を論じる研究など、盛んに研究が行われている。本研究では、チュルク語と構造の類似した日本語の研究成果を取り入れて研究を行うことで、チュルク語研究、日本語研究双方に新たな視点を提供することを目指している。

具体的な研究テーマとして主に次の2点に取り組んだ。まず、従来の研究ではあまり扱われてこなかったテーマとして、複合的動詞述語が受動化された場合、形態的、統語的にどのような受動文を構成するのかについて調査し、考察を行った。中央アジアのチュルク語では、二つの動詞からなる複合的動詞述語を受動化する場合、先行動詞だけを受動形にする、後続動詞だけを受動形にする、両方を受動形にする、という三つの方法があるが、どの方法がとられるかは、その複合的動詞述語の統語的な緊密性をはかる一つの目安となり、次の2点目のテーマとも深く関係する。その2点目のテーマとは、複合的動詞述語をどのように定義し、どのような枠組みで捉えるかという問題である。従来のチュルク語研究では「補助動詞」、すなわち語彙的意味が失われ文法化した動詞を含む述部を主な対象として研究が行われてきたが、これを見直し、「補助動詞」以外の複合的動詞述語を含め

た、より広い複合的動詞述語の枠組みの検討を行った。

調 査

キルギス共和国ビシケク出身で大阪大学大学院言語文化研究科博士課程に在学中のシャミシエワ・ナズグリさんに言語調査に協力していただき、面接調査を行った。

結果と考察

1. 複合的動詞述語を受動化する三つの方法

中央アジア、キルギス共和国を中心に話されているキルギス語では、動詞語幹に $-(i/i/u/ü)l$ (または $-(i/i/u/ü)n$) という接尾辞がつくことによって受動文が作られる：

(1) *tereze-ler sindir-il-di* 「窓ガラスが割られた」
ガラス-複数 割る-受動-過去

(1) では、*sindir-*「割る」という動詞語幹に $-il$ という受動接尾辞がつくことにより、主語 *tereze-ler*「窓ガラス」が「割る」という動作の主体ではなく、対象であることが示される。では、二つの動詞からなる複合的動詞述語をもとに受動文が作られる場合はどうかを見ると、キルギス語では、次の三つの方法が観察される (例として *al-ıp kel-*「持ってくる」の受動形を挙げる)：

[方法1] 先行動詞と後続動詞の両方に受動接尾辞をつける方法: *al-in-ıp kel-in-*

[方法2] 後続動詞だけに受動接尾辞をつける方法: *al-ıp kel-in-*

[方法3] 先行動詞だけに受動接尾辞をつける方法: *al-in-ıp kel-*

キルギス語では [方法1] が広く用いられるが、この方法はタートル語やトルクメン語では観察されるものの、周辺の他のチュルク語で一般的な方法ではない。隣接するカザフ語やウズベク語などのチュルク語では [方法2] と [方法3] がもっぱら用いられる。

上の例に挙げた *al-ip kel-*「持ってくる」の場合は、三つの方法のいずれでも受動化することができ、三通りの受動形の間には顕著な意味の違いはない。しかし、どの複合的動詞述語にも三通りの受動化方法が成立するわけではなく、そこにはいくつかの要件が関わっている。ここでは、そのうちの二つの要件について述べる。

まず、意味的かつ統語的に緊密度の高い複合的述語では、[方法1]と[方法2]のみが成立し、[方法3]は成立しにくい。例えば、*sat-ip al-*は、「売って取る」の形で「買う」という意味を表し、意味の特殊化（語彙化）が見られる点で複合語と共通する性質をもっており、受動化される場合のもっぱら[方法1]または[方法2]が取られ、[方法3]は成立しにくい。これは、[方法1][方法2]が*sat-ip al-*を統語上ひとまとまりの単位として受動化するのに対して、[方法3]は先行動詞だけを取り出して受動化し、新たな複合的述語を作る過程であるため、*sat-ip al-*のような意味的かつ統語的に緊密度の高い複雑述語では用いられにくいと考えられる。

次に指摘できるのは、後続動詞が本来の語彙の意味を失った補助動詞として用いられる場合、それがアスペクトの意味だけを表す場合には、[方法3]による受動化が最も多く一般的だという点である。中央アジアのチュルク語では、「持続状態」を表す補助動詞として、「寝る」、「立つ」、「座る」、「歩く、行く」という四つの動詞が用いられる。補助動詞はふつう完了、始動、持続状態など何らかのアスペクトの意味を含んでいるが、同時に「すばやく」「徐々に」などの動作様態の意味や、日本語の「～てあげる、もらう」に相当する受益表示の意味などを備えていることが多い。しかし、「持続状態」を表す上の四つの補助動詞は、もっぱらアスペクトの意味を添える機能しか持たない。キルギス語では、*jat-*「寝る」、*tur-*「立つ」、*otur-*「座る」、*jür-*「歩く」という四動詞が、補助動詞としてある時点における「動作の持続」や「変化の結果の状態」を表す¹⁾が、これらを含む複合的動詞述語が受動化された場合には、[方法3]がとられることが多く、[方法1]や[方法2]は成立しにくい：

- (2) a. *meçit kur-ul-up jat-a-t.* [方法3]
 モスク 建てる-受動- 寝る-現在-
 副動詞語尾 3人称
 「モスクが建てられている」

- b. **meçit kur-ul-up jat-il-a-t.* [方法1]
 モスク 建てる-受動- 寝る-受動-現在-
 副動詞語尾 3人称

- c. **meçit kur-up jat-il-a-t.* [方法2]
 モスク 建てる-副動詞語尾 寝る-受動-現在-
 3人称

これは、受動のような態（ヴォイス）接辞の方がアスペクト接辞よりも動詞語幹との意味的関連性が強く、語幹との融合が起こりやすいという Bybee の仮説²⁾にも沿う現象である。だが、補助動詞 *tur-*「立つ」だけは[方法1]も成立する場合が少なからずあり、一般的な[方法3]とは若干の意味的な違いをもって用いられているようである：

- (3) *keçeš-ter ber-il-ip tur-ul-a-t.* [方法1]
 助言-複数 与える-受動- 立つ-受動-現在-
 副動詞語尾 3人称
 「助言が与えられている」

このとき、[方法3] *ber-il-ip tur-a-t*であれば、発話時点で「助言が与えられる」という動作が持続していることを表すのに対し、(3)のような[方法1]では発話時点だけでなく常に動作が行われているという恒常的な状態を表すという違いが見られる。

2. より広い範囲の複合的動詞述語を包括する構文概念の必要性

前節で挙げた *al-ip kel-*「持ってくる」は、従来の構文概念のどれにも属していなかった。すなわち、後続動詞 *kel-*「来る」は語彙の意味を保っているもので、補助動詞ではない。「連続した複数の動詞で構成される述語」を含む構文概念としては、「補助動詞構文」のほか、「副動詞構文」³⁾や「連続動詞構文」⁴⁾があるが、*al-ip kel-*「持ってくる」はそのいずれにも属さない。なぜなら、「副動詞構文」として認められるためには先行動詞 *al-ip*「持って」が後続動詞 *kel-*「来る」を副詞的に修飾する従属節を作らなければならないが、語順テストなどの結果は *al-ip* が従属節を構成しないことを示しているし、また、先行動詞と後続動詞の間に補語が挿入されても全体としてひとまとまりの述語と認められる「連続動詞構文」と異なり、*al-ip kel-*の場合は、間に例えば *üy-gö*「家に」という後続動詞の補語が挿入されれば二つの出来事を表す二つの述語として解釈されるからである。また、*al-ip kel-*「持ってくる」は口語では縮約されて *apkel-*という形式になることが多いが、母音調和が及んでおらず、また *p* という副動詞語尾が保存されていることから、あくまで縮約形であって複合語 (compound) とは認められない。

しかし、*al-ip kel-*「持ってくる」が受動化される場合には、前節で見たように、[方法1] や [方法2] によって統語上ひとまとまりの単位として受動化される。このように、従来のどの構文概念にも属さないが統語的緊密性をもつ複合的動詞述語には、前節でも紹介した *sat-ip al-*「買う」のほか、*at-ip tüsür-*「打ち落とす」などいくつかの述語がある。そこで日本語研究をもとに提案された「二つの動詞で構成されるひとまとまりの複合的述語」(Verb-Verb complex) という新たな構文概念⁵⁾によって、チュルク語の複合的動詞述語についても、従来の「補助動詞」では包含できなかった複合的動詞述語も含めて、より包括的にその本質を捉えられると考えている。

要 約

中央アジアのチュルク語に見られる複合的動詞述語について、キルギス語を中心に、まず、それらが受動化された場合にどのような受動文を構成するのかを観察し、三つの受動化方法があり、その分布にはいくつかの要件が関わっていることを指摘した。また、従来の構文概念

には収まらない複合的動詞述語が存在することを示し、新たな構文概念の必要性を主張した。

謝 辞

公益財団法人三島海雲記念財団より平成27年度学術研究奨励金を賜ることができ、榮譽に感じております。助成をいただいたおかげで不自由なく調査・研究が進められましたこと、心から感謝いたしております。

文 献

- 1) アクマタリエワ・ジャクシルク：キルギス語の〈持続〉を表わす補助動詞—*jat-*, *tur-*, *otur-*, *jür-*を中心に、東京外国語大学博士論文、2014。
- 2) J. L. Bybee: *Morphology*, pp. 4–5, John Benjamins Publishing Company, 1985.
- 3) M. Haspelmath: *Converbs in Cross-Linguistic Perspective*, pp. 1–55, Mouton de Gruyter, 1995.
- 4) A. Aikhenvald: *Serial Verb Constructions*, pp. 1–68, Oxford University Press, 2007.
- 5) T. Kageyama, et al.: *Verb-Verb Complexes in Asian Languages*, Oxford University Press, forthcoming.